

## プロローグ In Memoriam

ぼくはプロレスラーはヒーローHeroなんだと考えている。

ヒーローは英雄だったり人気者だったり物語の主人公だったりする。歴史上のヒーローがいて、スポーツのヒーローがいて、文化や芸術、科学や哲学や思想のヒーローもいるだろう。実在の人物の場合もあるし、架空のキャラクターの場合もある。

プロレスのヒーローたちは、英雄であり人気者であり物語の主人公である。もちろん、スポーツのヒーローだし、プロレスを文化や芸術とカテゴライズするならば、プロレスラーは文化的なヒーロー、芸術的なヒーローだととらえることもできる。プロレスラーはみんな実在の人物ではあるけれど、リング上で起こることや観客のまえてデイスプレイされる人格についてはフィクションだったり架空のキャラクターであったりする場合もある。

プロレスラーは、試合をしているときだけがプロレスラーになる時間というわけではな

くて、ふだん着で街を歩いているときも、食事をしてるときも、それこそ眠っているときもずっとプロレスラーでありつづける。プロレスをやる側⇨プロレスラーのほうでつねにそういうスタンスをキープしていることもあれば、プロレスを観る側⇨プロレスファンがプロレスラーに対してつねにキャラクターどおりのイメージを求めていることもある。アイデンティティーとその社会性といつてしまえば、やっぱりそういうことにもなる。

プロレスとは虚実皮膜——芸は実と虚との皮膜の中間にある、事実と虚構の微妙な接点に芸術の真実がある、という近松門左衛門の論——のジャンルといわれ、ファクトとフィクションの境界線がわかりにくい。もつとわかりやすくいえば、現実とファンタジーがごちゃ混ぜになっていて区別がつきにくい。そして、そのなんだかよくわからないところがプロレスなのである、というコンニャク問答そのものがプロレスの醍醐味だったりする。

この本には10人のヒーローたちが登場する。時代は昭和から平成まで、西暦でいうと1960年代あたりから21世紀のはじめあたりまで、日本やアメリカ、ヨーロッパのリングで一世を風びした外国人レスラーたちだ。いずれもプロレスファンだったらだれでもその偉大さをわかっている伝説の男たちで、プロレスファンでなくても、たぶん名前前くらいは

知っているであろう超有名な、<sup>リョウガ</sup>ガイジン。本名のままのレスラーもいれば、リングネームのほうが本名を凌駕してしまつたレスラーもいる。

〳〵神様〳〵 カール・ゴツチ

〳〵白覆面の魔王〳〵 ザ・デストロイヤー

〳〵巨人〳〵 アンドレ・ザ・ジャイアント

〳〵人間風車〳〵 ビル・ロビンソン

〳〵爆弾小僧〳〵 ダイナマイト・キッド

〳〵人間魚雷〳〵 テリー・ゴードイ

〳〵殺人医師〳〵 スティーブ・ウイリアムス

〳〵入れ墨モンスター〳〵 バンバン・ビガロ

〳〵皇帝戦士〳〵 ビッグバン・ベイダー

〳〵暴走戦士〳〵 ロード・ウォリアー・ホーク

外国人レスラーではあるけれど、10人が10人ともその時代ごとの日本のプロレス史、日本のプロレスラー、日本のプロレスファンと深いかかわりを持った特別な人たちだ。一人ひとりに漢字のニックネームがついているのは、彼らがじっさいのプロレスの試合（とその映像）だけではなく、活字メディアによって日本のプロレスファンとつながっていたことと関係している。現在進行形の外国人レスラー群にはこういう漢字やカタカナのニックネームはついていないし、インターネットから発信されるものすごい量の（賞味期限のある）情報のなかでは定番のフレーズはなかなか定着しない。

〃神様〃 ゴッチと 〃人間風車〃 ロビンソンは、超一流のプロレスラーであっただけでなく、現役を引退したあとも指導者、プロレスの哲学者として日本のプロレス史の重要な登場人物でありつづけた。〃白覆面の魔王〃 デストロイヤーは力道山、ジャイアント馬場のライバルであり、日本に在住してタレント活動をした最初の外国人レスラーだった。

〃巨人〃 アンドレと 〃爆弾小僧〃 ダイナマイト・キッドは、体のサイズはまったくちがうが、ふたりともテレビ（地上波）のプロレス中継がゴールデンタイムの人気番組だった時代のお茶の間の人気者。日本でもアメリカでもスーパースターだったが、現役生活の最

後のチャプターを日本のリングで過ごした。

80年代から90年代にかけて活躍した、人間魚雷、ゴードイ、殺人医師、ウィリアムス、入れ墨モンスター、ビガロ、皇帝戦士、ベイダー、暴走戦士、ロード・ウォリアー・ホークの5人は、いずれもアメリカのメジャー団体でメインイベンターのポジションにありながら、それぞれがそれぞれの理由とプロセスでアメリカのレスリング・ビジネスから離れ、日本をホームリングに選択した。いま40代後半から50代以上のプロレスファンにとっては、リアルタイムでその試合をいちばんたくさん観たのがこの世代のスーパースターたちだろう。

日本のプロレスファンにとっては忘れることのできないこの10人の外国人レスラーたちは、もうだれも地上にはいない。ゴッチ、ロビンソン、デストロイヤーのようにすっかり長生きしてくれた人たちもいれば、アンドレのように突然、この世を去って伝説になった人もいる。ホーク、ビガロ、ゴードイ、ウィリアムス、そしてキッドやベイダーはまぢがいなくスーパースターではあったけれど、いつもどこかハッピーになれなくて、破滅的なところがあった。

各章のストーリーのなかにほくが出てくるときは、筆者〴〵という表記を使った。ほくは文中を動きまわるレスラーたちと読者のみなさんをつなぐメディアム——メディアの単数形という意味で、霊能者という意味ではない——としてそこにいるだけで、ストーリーそのものには関係していない。

ヒーローは死んでも生きている、なんていうとずいぶんへんな日本語になるけれど、この本に登場する10人の外国人レスラーたちはほくたちの心のなかにちゃんと生きている。古いVHSのビデオを引っ張りだしてくれば彼らの試合をまた観ることができし、ユーチューブで検索すればいろいろな映像にもめぐり逢<sup>あ</sup>える。ほくはいつもこう感じている。プロレスラーには、この世〴〵と、あの世〴〵の境界線はないのかもしれないと——。

付記 アメリカの団体WWEの表記について。WWE（ワールド・レスリング・エンターテインメント〳〵ダブリュー・ダブリュー・イー）は、かつてWWWF（ワールドワイド・レスリング・フェデレーション〳〵1963年3月〳1979年2月）、WWF（ワールド・レスリング・フェデレーション〳〵1979年2月〳2002年5月）を呼称していましたが、現在は活字、映像、著作権における表記を正式名称WWEで統一しています。本書もこれに従い、過去のできごとに関しても本文中の表記を、例外を除きWWEで統一しました。